

## ○立命館大学日本文学会編「ハンドブック」刊行のこと

本学会の昨年度のもっとも大きい成果はなんと言っても研究入門や基礎講読に用いるテキストとして「ハンドブック古典文学」「ハンドブック近現代文学」の二冊を先生方や院生の協力を得て刊行できたことである。前者には古典文学研究に關してくずし字の解読や注釈方法、日本語学研究の紹介などが、後者には近現代文学研究に關して、作品を読む手法や注釈のあり方、国語教育に關する手引きなどが初心者用にも巻末に「文学研究の招待状」があり、各先生方の今の研究課題やお勧めの本などが掲げられ、興味ある内容になっている。自讃めいた物言いではあるが、日本文学専攻として学び始めた者への図書というだけでなく、広く研究領域を見渡すことのできる好著に仕上がっていると思う。時折、市販されている本書を思っただけなくもなるのである。

## ○木村一信先生のご退職のこと

木村先生は一九九〇年四月に本学に着任され、主として日本近代文学関連の授業を担当された。「昭和作家の『南洋行』」（世界思想社）、『不安に生きたる文学誌』（双文社出版）の著書をはじめ、多くの編著書によって示されるように、近代の一時期、海外に及んだ日本人作家の作品や伝記研究の第一人者である。先生は途中で六年間、立命館インドネシア事務所長も務められ、また昨年度まで五年間、文学部長を勤められた。日本文学研究と大学、学部運営にも手腕を発揮してこられ、我が日本文学専攻の大きな柱でもあったが、この度、他大学の学長として請われ、本学をご退職になった。とりわけこの分野の研究を志す学部、院生にとつて大きな痛手ではあろうが、今後とも意欲的に研究に邁進することで先生の期待に添えて欲しい。

## ○「論究日本文学」のこと

日本文学会の研究誌「論究日本文学」が刊行されたのは一九五四年七月のことであった。今を遡ること五十六年前のことである。今号は九十二号に

なる。実に息の長い営みであることか。感嘆するばかりでなく、教員と卒業生、在学生が共に支えあつて今日に至つたことと考へている。近時、会員新著のますます隆盛であることを思い合わせると、何とも意気軒昂の感がする。国際化とは他国の文化文物を知るのみでなく、自国と他国との繋がりを深く見つめることが要求されるはずである。その意味でも「日本文学」を時代の潮流の中で不易と流行を相互に見つめ直すことも大切であろう。

## ○水田潤先生のご逝去のこと

本年一月末日、日本文学専攻の教員でもあり、文学部長でもあった水田先生が亡くなられた。「私は昭和生まれではありません」―国語科教育法が何かの授業で先生が開口一番に仰つたことを受講生であった私は鮮明に覚えている。本学の専任としては一九七〇年から二十年間、黒髪豊かに紳士然とした風貌で本学の教壇に立ち、近世文学や国語科教育関係の講義を担当された。ご冥福をお祈りする。

(中西健治)